

旧広島市域における宗教文化の変容と現状

—忘れられた厳島神社—

広島修道大学 中道豪一

本報告は、神道の事例を中心に旧広島市域（現在の広島市中心部）における地域宗教文化の変容と現状について考察を加えることを目的とする。具体的には「旧広島市域に存在し、祭礼日には多くの市民でにぎわった厳島神社（広島県広島市）が忘れられている点」を変容とし、「かつての状況を忘れ、世界遺産厳島神社（広島県廿日市市）を広島の顔として語り、旧広島市域の文化資源活用のチャンスを損ねている点」を現状として提示する。

広島県広島市は原子爆弾の被害を受けた世界初の都市として高い認知度を持ち、近年も国内外から多数の観光客が訪れている。ユネスコ世界遺産に登録された原爆ドームを始めとする平和記念公園・平和資料館といった原子爆弾関連の施設は、連日多くの人で賑わっており、広島市のイメージを形成する拠点となっているといえよう。

しかしそうした旧広島市域で原子爆弾関連以外の観光資源、それも郷土史に連なるような事例を提示する動きは低調と言わざるを得ない。原子爆弾による惨劇というインパクト、市街地が灰燼に帰した等の物理的事実もあるが、かつて地域の人々が大切にしていた歴史が、今なお注目されず「忘れられた」状況にある点は特徴的である。

その具体例の1つが旧広島市域に存在する（した）厳島神社と、それにまつわる祭礼の存在である。広島市中心部から南西方向に位置する広島県廿日市市にはユネスコ世界遺産に登録された厳島神社が鎮座しているが、原爆投下前の広島には、この世界遺産厳島神社と名称を同じくし、祭礼日には多くの住民で賑わった2つの厳島神社が存在した。そのうちの1つが、現在の平和記念公園の位置に存在した誓願寺境内の厳島大明神である。

厳島大明神では、世界遺産厳島神社で管絃祭が行われる旧暦6月17日に合わせ祭礼が催され、賑わったことは江戸期の文献は勿論、戦前の市民に於いても周知の事実であったが、現在この事実を知る者は少ない。平和記念公園というとゴールデンウィークに開催されるフラワーフェスティバルや8月6日の平和記念式典がイメージされようが、原爆で焼失してのち、元の場所で再建されることはなかったこともあり、現在の広島において厳島大明神を想起できる人間はごく稀である。

もう1つの厳島神社がJR広島駅から徒歩10～15分の距離にある橋本町の厳島神社である。閑静な場所だが、ここはかつて明神浜と呼ばれ、旧暦6月17日には世界遺産厳島神社で行われる玉取祭も行われていただけでなく、御供船(おともぶね・おともんぶね)と呼ばれる船が川面を賑わせていた場所でもある。御供船とは管絃祭に合わせ、旧広島市内から世界遺産厳島神社に向けて移動する船のことで、江戸時代に端を発する広島風物詩であったが、これもまた知る人は稀である。

これらが「忘れられた」一因は間違いなく原爆の惨禍にある。しかし原爆投下後70年が経過しているにも関わらず、存在したことすら知られていない状況は、広島地域の宗教文化を考える上で見逃し難い事象であると共に、地域性について言及する際にも留意すべき事項と考えられる。特に観光資源として世界遺産厳島神社をPRしながら、それに関連する地域資産を見逃している点は残念な現象であり、研究の深化と共に実際活動への連携を意図すべきものと考えられる。